巻　頭　言

ＪＦＥスチール株式会社
専務執行役員 東日本製鉄所長

フジコー技報第21号によせて

夢の扉をひらくもの造り

丹村　洋一
Yoichi Nimura

まず、今回　フジコー殿の第 21 号「創る」への寄稿の機会を与えていただき感謝をいたします。また、この技報が 1993 年の発刊以降、絶えることなく続けられてきたことこそが技術への思いと開発を重視される会社の姿勢の表れだと重ねて敬意をいたします。

さて、寄稿にあたり改めて最近のもの造りに対し感じていることを綴ってみたいと思います。私の勤務いたします JFE スチール東日本製鉄所千葉地区は臨海地で一環の製鉄業を始めて、今年で 61 年となりました。そして、今、川崎製鉄、NKK の統合を経て現在に至っております。その間に、オイルショック等の数々の障害を乗り越え脈々と鉄造りを続けてまいりました。また至近では、2011 年の東日本大震災の疵もいえない中での円高等々と、もの造りに対し決して良い環境とはいえませんが、中国を筆頭とする新興勢力との大競争時代を乗り切ろうと切磋琢磨している状況です。その大競争時代のなかで、差別化した製品を開発し世の中に出してこそ、生き残りのための技術といえます。

さて、この寄稿にあたり 2 つの事柄を紹介したいとおもっています。1 つは、フジコー殿の技術開発力のすばらしさを紹介した「夢の扉+」というテレビ番組であり、もう 1 つは鉄の建築物、構造物の写真集です。先の件は、皆さんすでにご存知の「光触媒の活用した製品の大量製造技術」であります。山本社長殿の数々の感動を発言・会話が紹介されていますが、10 年間もたゆまぬ夢への執念と継続力に敬意を表します。「赤字を続ける開発こそが、まねできない技術を生む」多少の言葉の違いはありますが、経営者の言葉が開発者の支援となる感動の言葉だと思います。ただ、忘れていけないのは、このような継続力のある開発者をたやさない人材を育ててゆく環境を継続することが重要性であると思います。先に私どもの製鉄所は 60 年の歴史を持つと述べましたが、今まさに世代交代の真っ只中技術継承が差し迫った課題となっています。知識のみならず開発への執念とか、極限を追求する熱意とか、いわゆるチャレンジする気持ちとかを絶やさない人間を育てで行くことが技術力の根源であることを忘れてはいけないのでしょう。この「夢の扉+」を拝見して技術力は人間力であり、それを支援する環境造りがもの造りには重要であると認識いたしました。

もう 1 つは、鉄の写真集です。　数多くの鉄の構造物、ビル、鉄橋、航空機…　に混じり製鉄所が掲載されております。いずれも、美しく時代を超越した作品であります。これらの多くは 1900 年代の初めに建設、製造されたもので、現在も私たちの生活に密着し使われている構造物が作品としてとりあげられています。作者の意図はともかく鉄を造る技術者としては、それぞれが、長い間、形状を失うことなく、初期の目的を全うしていることに感動を覚えます。一方、それぞれが作品と呼ぶに値する芸術品としての美しさをもっていることに感動を覚えます。鉄造りの技術者として、

何かしら形を有し、普遍的な美しさを維持することができる素材としての鉄に改めて魅力を感じ、その製造にたずさわるっていることに誇りをもつことができました。もの造りの技術伝承のキーワードは人間力と前述いたしましたが、もうひとつは、その造りに携わることに誇りを持つことだと思います。この写真集の鉄の芸術品は、製造に携わった数多くの技術者、現場の工員方々の誇りの結晶です。後世に残していきたいような価値ある作品を生む技術力を伝承する活動こそが、今の世代交代にもとめられているのだと認識いたします。

ところで、この作品集の中で朽ち果てた製鉄所の写真が被写体としてとりあげられています。製鉄所に働くものとして、なんとも寂しい光景です。1950 年代に絶頂期を迎え、競争のない時代のなかで操業を続け新しい技術開発をせず、また技術導入を怠った結果の姿で、今は、カジノリゾートして運用されているそうです。たった 20 年間の市場の変化に対応できなかった結果です。すばらしい鉄の作品とよべるような構造物を製造していたにもかかわらず、きっと関わった人々は誇りを持って鉄造りに従事したはずでしょう。しかし、「夢の扉+」をひらく、こじ開けていく執念と未来に続くような技術開発を怠った姿です。

もの造り・創りには、技術の伝承の「人間力」、技術開発の「支援する環境」、造ることへの「誇り」、といずれも欠かすことのできない要素であることを感じています。大競争時代に生き残っていくには、私たちの技術が廃墟の姿として写真集の１ページに数十年後、いや　数年後に決して掲載されないためには、今　何が必要なのかを考え、議論する真っ只中にいるのだと思います。

改めて、フジコー殿の技報の寄稿に際して、市場を見失わないための製品、市場を生み出す製品を短期間で開発する技術開発をすることが今の日本の製鉄業の大競争時代を生き残っていくための条件であることを再認識したしだいです。そのためには、製造現場を預かる責任者として、まずは、人間力のある技術者、技能者を育成することを目指し活動をしていきたい決意を新たにいたしました。

最後に、フジコー殿が夢の扉を開くすばらしい技術力を引き続き持ち続け、今後、日本、世界の技術リーダーとして活躍されることを祈って私の巻頭言とさせていただきます。

【履歴書】

にむら　よういち
丹村　洋一

昭和２９年１月２２日生

【学　歴】

昭和５４年３月　早稲田大学大学院理工学研究科修士課程　資源及び金属工学専攻修了

【略　歴】

昭和５４年４月　日本鋼管株式会社入社
平成１２年４月　鉄鋼技術センター製鋼技術開発部経営スタッフ
平成１３年４月　エヌケーケー条鋼株式会社出向
平成１４年４月　日本鋼管株式会社 京浜製鉄所製鋼部長
平成１５年４月　ＪＦＥスチール株式会社　東日本製鉄所（千葉地区）製鋼部長
平成１８年４月　技術企画部主任部員（製鋼ＳＢＵリーダー）
平成２０年４月　常務執行役員 東日本製鉄所副所長
平成２３年４月　専務執行役員 東日本製鉄所長